

(1) 25歳の男性. Guillain-Barre症候群. 発症後3日で運動麻痺は進行しており, 呼吸筋麻痺のため人工呼吸器管理中である. 理学療法で適切でないのはどれか. (50p-8)

正解 2

### 1. 体位変換

×: 適切. 人工呼吸器装着により, 長期臥床となれば, 深部静脈血栓症や廃用症候群, 関節拘縮を予防するために必要

### 2. 筋力増強運動

○: 不適切. 難病に筋力増強は禁忌. 過用性症候群となる可能性がある.

### 3. 胸郭ストレッチ

×: 呼吸機能や呼吸筋筋力の維持, 向上のため.

### 4. 関節可動域運動

×: 早期からの可動域運動が必要. 関節拘縮の予防のため.

### 5. 30°程度のリクライニング位

×: ギャッジアップによって起立性低血圧の予防をする

(2) 軸索変性型のGuillain-Barre症候群で適切なのはどれか。(48a - 38)

正解 3

1. 発症後1週間経過すれば高負荷の訓練は可能である.

×: 難病に高負荷の訓練は禁忌. その上, 軸索変性型は重症例である.

2.  $\gamma$ -グロブリン大量療法中に運動は行わない.

×:  $\gamma$ -グロブリン大量療法中であっても廃用症候群や関節拘縮を予防するために行うべき.

3. 下垂足に対して軽量の短下肢装具を作製する.

○: 症状が固定すれば, 下垂足に対して適応である短下肢装具を作製する.

4. 手内筋麻痺は3か月以内に回復する.

×: 手内筋麻痺の多くは6ヶ月以内に回復する.

5. 発症後6か月間で症状は固定する.

×: 1ヶ月程度で固定し, 6ヶ月以内に回復する.